日本語試験に関する一考察
－日本語非母語話者対象の試験を中心に－

山　崎　　恵

0．はじめに

現在、日本語の能力を測定する試験は種々見られる。その試験には日本語母語話者を対象としたもの[1]だけでなく、非母語話者対象のものもある。

筆者は本学で1年次の留学生（交換留学生を含む）に日本語を教えているが、2000年代に入ってからアカデミック・ジャパニーズという言葉が使われるようになった。一般的に言えば、アカデミック・ジャパニーズとは留学生（日本語非母語話者）に限らず、大学や大学院など高等教育の場で求められる学術的活動に関連した日本語を意味すると考えられる。しかし、この言葉は、2002年度から日本留学試験という日本留学のための新たな試験が導入され、それに関する報告書の中で使われている[2]ため、日本語教育関係者はアカデミック・ジャパニーズの主たる学習対象は、大学・大学院に進学予定あるいは在籍中の留学生だと認識している者が多いと思われる。なぜなら、日本留学試験はこれまで日本の大学等への進学を希望する者に対して高等教育機関の多くが受験を義務づけていた「日本語能力試験」と「私費外国人留学生統一試験」[3]の二つの試験に代わるものとして、導入されたからである。日本留学試験が導入されるまでは、各大学等での外国人留学生の日本語力を測る試験として日本語能力試験が義務づけられていたのである。しかし、留学生の送出し国として上位にある中国において日本留学試験が実施できないという事情もあり、実際には現在も日本語能力試験を日本の大学等では入試出願資格条件にしているところが多い。最近では、日本留学試験、日本語能力試験だけでなく、J.TEST 実用日本語検定を加えている機関も増えている[4]。この試験は、年間の実施回数が6回と他の試験より多く実施され、中国でも受験できる[5]という理由もあると考えられる。本学も出願資格に、日本語能力試験N2以上を取得しているか、日本留学試験（日本語）を受験し「記述」領域で25点以上、「読解」「聴解・聴読解」領域でそれぞれ100点以上を取得しているか、あるいはJ.TEST 実用日本語検定Dレベル以上を取得していることを条件に課している[6]。日本語教育機関では、日本の

大学等、高等教育機関へ進学を希望する外国人のためにこれらの日本語試験の条件を満たすよう試験対策を行い、大学でも留学生の日本語能力を測る物差しとして受験を勧奨し、日本語の授業の中でも過去の試験問題を利用するなどして、対策に取り組んでいるところが多い。

本稿では、日本語非母語話者対象の代表的な日本語試験として、日本留学試験と日本語能力試験、J.TEST 実用日本語検定の三つの試験を取り上げ、実施団体が公表している趣旨・目的等を整理し、それぞれの試験の特徴を比較・検討する。そして、これまで大学で留学生に日本語を指導してきた現場経験に照らし合わせて、留学生に求められる日本語能力について考察する。併せて、日本の高等教育の場で求められる日本語を媒体とした能力についても考えたい。

1．日本留学試験（以下「EJU」）の概要

この試験は、独立行政法人日本学生支援機構（以下「JASSO」）が、文部科学省、外務省、大学及び国内外の関係機関の協力を得て、2002年より年2回（6月と11月）、日本国内だけでなく国外でも実施している。JASSO の HP には、「日本の大学（学部）等に入学を希望する者について、日本の大学等で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行うことを目的に実施する試験」（下線は筆者）とある[7]。EJU は試験の回数を重ねる中で、日本語科目の試験問題について、改定の必要性が浮き彫りになり、2010年第1回試験（6月実施）より改定された（［表1］参照）。

［表1］EJU 日本語科目の変更点

領域	得点範囲		時間		試験課題の変更点
	改定前	改定後	改定前	改定後	
記述	文法的能力0～3点	0～50点	20分	30分	課題のタイプの拡充
	論理的能力0～3点				
読解	0～160点	0～200点	30分	40分	複問及び長文の導入
聴解	0～120点	0～200点	70分	55分	
聴読解	0～120点				
時間合計			120分	125分	

大きな変更点は4領域が3領域となり、「聴解」と「聴読解」が「聴解・聴読解」と1領域にまとまって、200点が最高点となったこと、「記述」の得点範

囲が広くなったことである。改定前は「文法的能力」と「論理的能力」について、各3点ずつ、6点が最高点であったが、改定後は50点となっている。この得点範囲は、「記述」以外は素点ではなく、共通の尺度上で表示し、「記述」については基準に基づき採点されているという。EJUのような大規模試験では、採点の機械的処理ができる多肢選択（マークシート）方式が主流だが、「記述」が導入されたことで、受容面だけでなく産出面での能力が測れる点で評価できる。しかも、改定前より得点範囲が広くなったということは、以前より「記述」にウェートがおかれるようになったということになる。試験の全体時間は、改定前より5分長くなっただけだが、「記述」と「読解」の時間がそれぞれ10分長くなり、反対に「聴解・聴読解」は15分短くなっている。ヒヤリングの集中力の持続という点では、60分以内が妥当だと考える。「記述」以外は多肢選択（マークシート）方式だが、「記述」は筆記試験で、「与えられた課題の指示に従い、自分自身の考えを、根拠を挙げて筋道立てて書くための能力を測定する」とある[8]。「聴解」は、すべて音声によって出題され、「聴読解」は、音声と視覚情報（図表や文字情報）によって出題される。試験の流れは「記述」(30分)→「読解」(40分)→「聴読解・聴解」(55分)の順である。

外国人留学生の入学選考にEJUを利用する日本の大学は、744校中416校、利用率は56%である。この利用率は国立大学が98%で、ほとんどの国立大学が利用していることがわかる。一方、公立大学は59%、私立大学は50%である(2014年9月現在)[9]。

また、EJUの成績を主な判断材料として合否を決める大学もある。この場合、各大学が個別に実施する日本語の筆記試験は無く、EJUの成績と高等学校の成績等の書類審査や面接で選考することになる。さらに国外でEJUを受験すれば、受験のために来日する必要はなく自国にいながら入学を希望する大学の合否が受けられ、留学生にとっては、有難い制度であろう。

しかし、今年（2014年）第2回実施予定（11月9日）の国外会場を見ると、インド、インドネシア（ジャカルタとスラバヤの2か所)、韓国（ソウルとプサンの2か所)、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、フィリピン、ベトナム（ハノイとホーチミンの2か所)、香港、マレーシア、ミャンマー、モンゴル、ロシアの14の国・地域で実施される[10]ようであるが、後述する日本語能力試験やJ.TEST実用日本語検定に比べると会場数が多いとは言えない。その上、渡日前入学許可校は国立大学21校、公立大学1校、私立大学55校の合計77校で、こちらもそれほど多いとは言えない（2014年9月現在)[11]。留学生の負担軽減を考えると、国外での試験実施の促進や渡日前入学許可を利用する機

関の推進が望まれる。

EJU は「日本の高等教育機関（特に大学学部）に、外国人留学生として入学を希望する者が、大学等での勉学・生活において必要となる言語活動に、日本語を用いて参加していくための能力をどの程度身につけているか、測定することを目的」としているが、そこで問われる能力について JASSO の HP での説明をもとに整理してまとめておこう[12]。

まず、読解、聴解、聴読解領域では、「文章や談話音声などによる情報を理解し、それらの情報の関係を把握し、また理解した情報を活用して論理的に妥当な解釈を導く能力が問われる」とあり、具体的に問われる能力として以下のような能力が挙がっている。

①直接的理解能力：言語として明確に表現されていることを、そのまま理解することができるかを問う。例えば、
- 個々の文・発話内で表現されている内容を、正確に理解することができるか
- 文章・談話全体の主題・主旨を、的確にとらえることができるか

②関係理解能力：文章や談話で表現されている情報の関係を理解することができるかを問う。例えば、
- 文章・談話に含まれる情報のなかで、重要な部分、そうでない部分を見分けることができるか
- 文章・談話に含まれる情報がどういう関係にあるかを理解することができるか
- 異なる形式・媒体（音声、文字、図表など）で表現されている情報を比較・対照することができるか

③情報活用能力：理解した情報を活用して論理的に妥当な解釈が導けるかを問う。例えば、
- 文章・談話の内容を踏まえ、その結果や帰結などを導き出すことができるか
- 文章・談話で提示された具体的事例を一般化することができるか
- 文章・談話で提示された一般論を具体的事例に当てはめることができるか
- 異なる形式・媒体（音声、文字、図表など）で表現された情報同士を相補的に組み合わせて妥当な解釈が導けるか

このような能力は、「大学等での勉学・生活の場において理解が必要となる次のような文章や談話を題材として」、すなわち、読解では「説明文、論説文、

（大学等での勉学・生活にかかわる）実務的・実用的な文書／文章、など」で、「聴解・聴読解」では「講義、講演、演習や調査活動に関わる発表、質疑応答および意見交換、学習上または生活上の相談ならびに指導・助言、実務的・実用的な談話など」で問われるとある。

次に、記述領域では「与えられた課題の指示に従い、自分自身の考えを、根拠を挙げて筋道立てて書く」ための能力を見るため、以下のようなことが問われるとされている。

- 与えられた課題の内容を正確に理解し、その内容にのっとった主張・結論を提示することができるか
- 主張・結論を支えるための、適切かつ効果的な根拠や実例等を提示することができるか
- 主張・結論を導き出すに当たって、一つの視点からだけでなく、多角的な視点から考察をおこなうことができるか
- 主張・結論とそれを支える根拠や実例等を、適切かつ効果的に、また全体としてバランスのとれた構成をなすように配列することができるか
- 高等教育の場において、文章として論述をおこなう際にふさわしい構文・語彙・表現等を、適切かつ効果的に使用できるか

出題される課題としては、「提示された一つまたは複数の考え方について、自分の意見を論じ」たり、「ある問題について現状を説明し、将来の予想や解決方法について論じ」たりするような課題が考えられるとある。

以上、EJU では、日本の大学等で必要とされる日本語について、受容面では、文字であれ、音声であれ、個々の内容を正確に理解し、全体として表現されている情報の主題・主旨を理解する能力、産出面では、得た情報から論理的に妥当な解釈を導ける文章表現能力を測定するということになる。しかし、これらの能力は、非母語話者に限ったことではない。母語話者である日本人学生にとっても必要な能力であろう。

2．日本語能力試験（以下「JLPT」）の概要

JLPT は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し、認定する試験で、海外は国際交流基金、国内は日本国際教育協会（現・日本国際教育支援協会）が共催で1984年から始まった。今では、海外は64の国・地域、206都市で実施、国内は44都道府県で実施されており（2013年の実績）[13]、世界最大規模の日本語試験である。2009年からは、７月と12月の年２回実施されるようになり[14]、

2010年にはコミュニケーション能力をより重視した、新しい日本語能力試験に改定された。その改定のポイントは以下の４点である。

① 課題遂行のための言語コミュニケーション能力の測定

日本語の「言語知識（文字・語彙・文法）」と、その知識を利用してコミュニケーション上の課題を遂行する能力を測る「読解」「聴解」の三領域で構成されている。

② レベルを４段階（旧１級、２級、３級、４級）から５段階（N1、N2、N3、N4、N５）へ改定

［表２］旧試験との比較

N1	旧１級よりやや高めのレベルまで測れるようになる。合格ラインは旧試験とほぼ同じ。
N2	旧２級とほぼ同じレベル。
N3	旧２級と３級の間のレベル。（新設）
N4	旧３級とほぼ同じレベル。
N5	旧４級とほぼ同じレベル。

［表２］に示されたように、N4、N5からN1、N2への橋渡しのレベルとして新しくN3が設けられた。これまで日本語教育界では、一般に日本の大学の学部入学レベルはN2（旧２級）取得、大学院入学レベルはN1（旧１級）取得と考えられてきたが、「N1とN2では、現実の生活の幅広い場面で使われる日本語がどのくらい理解できるかを測」るとある[15]。

各レベルの認定の目安を［読む］［聞く］という言語行動で表してあるが、N1、N2の認定の目安については次のように記されている[16]。

N1は「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」とあり、［読む］［聞く］の言語行動は以下のとおりである。

［読む］・幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる。

・さまざまな話題の内容に深みのある読み物を読んで、話の流れや詳細な表現意図を理解することができる。

［聞く］・幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。

N2は「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使

われる日本語をある程度理解することができる」とあり、［読む］［聞く］の言語行動は以下のとおりである。

［読む］・幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論など、論旨が明快な文章を読んで文章の内容を理解することができる。

・一般的な話題に関する読み物を読んで、話の流れや表現意図を理解することができる。

［聞く］・日常的な場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。

③　尺度得点による「得点等化」

JLPT の得点は素点ではなく尺度得点を導入し、等化という方法で、試験の得点が出題された問題の難易度の影響を受けることなく、常に同一の基準の下で日本語能力を測定し、公平性を保っている。得点の範囲は各得点区分が 0 ～60点で、総合得点の範囲は 0 ～180点になる。

④　「日本語能力試験 Can-do 自己評価リスト」の提供

これは、受験者や周りの人々が「このレベルの合格者は日本語を使ってどんなことができそうか」というイメージを作るための、試験結果の解釈の参考情報として提供するもの[17] で、このリストは、「日本語能力試験の各レベルの合格者が、日本語でどんなことができると考えているか」を受験者の自己評価調査の結果に基づいてまとめたものだという[18]。この④の「Can-do-Statement」は言語教育を考えるベースとして近年、世界的に広がっている[19]。

しかし、これまでの日本語教育では、学習目標や評価を④の Can-do という表し方で活用しておらず、旧日本語能力試験では、言語知識の量（漢字や語彙の習得数、等）や学習時間数を認定基準としていた。新たな日本語能力試験では「課題遂行のための言語的コミュニケーション能力」を測定することを目指し、「日本語を使って、何が、どのようにできることが求められているのか」という点を重視している。従来の言語知識重視の試験では高得点が取れても、運用能力が身についていないという反省からの改定であった。合否判定も総合得点だけでなく「言語知識（文字・語彙・文法)」「読解」「聴解」得点区分の基準点の二つで行っている。これは、日本語能力を総合的に評価するためで、総合得点がどんなに高くても、得点区分の得点が一つでも基準点に達していない場合は不合格になる。

このように JLPT は高等教育機関などで求められるアカデミックな日本語に

限定することなく、一般の日本語運用能力を測ることに主眼がある。

近年、JLPT は日本の大学の留学条件として使われるだけでなく、就職、昇給や昇格の条件として使われるなど、受験目的が多様化している。国もポイント制を導入し、日本の出入国管理上の優遇措置が受けられるようにしたり、日本の医師等国家試験の受験や准看護師試験の受験のための条件としたり、EPA に基づくベトナムからの看護師・介護福祉士候補者選定の条件の一つとしたり、さまざまなメリットを打ち出している[20]。

3．J.TEST 実用日本語検定（以下「J.TEST」）の概要

J.TEST は日本語検定協会主催で、外国人の日本語能力を客観的に測定する試験として、1991年から始まったもので、試験は年 6 回実施されている。レベルは中級から上級者向けの「A-D レベル試験」、初級者向けの「E-F レベル試験」、入門レベルの「G レベル試験」がある[21] が、本稿では、D レベル以上について述べる。A-D レベルは1000点満点で点数によって能力を A~D に判定しており、出題内容は［表 3］のようになっている。

［表 3］A-D レベルの出題内容

領域	時間（125分）	配点（1000点）	出題分野
読解	80分	500点	文法語彙問題、読解問題、漢字問題、記述問題
聴解	約45分	500点	写真問題、聴読解問題、応答問題、会話・説明問題

D レベルは500点以上600点未満である。J.TEST も毎回難易度が一定なので、何回も受験することによって日本語力の上達度が測れるという。受験者全員に成績表が発行され、規定の点数に達した場合（400点以上）には、認定証が発行される。

「J.TEST AD レベルシラバス(暫定版)」(2014年 4 月 9 日）によると、日本語能力試験とのおおよその比較では、C レベル（600点）が N2程度、準 B レベル（700点）が N1程度、B レベル（800点）と A レベル（900点）は N1以上となっている[22]。また、2014年 5 月実施試験より、「合計点が認定基準に達しており、かつ 8 分野において無得点の分野がないこと」に変わったとある[23]。点数と評価については［表 4］にまとめた[24]。

［表４］A-D レベル評価

レベル	点数	評価
特Ａ級	930点以上	様々な分野、場面において高度なコミュニケーション能力がある。（高度な日本語の通訳ができる）
Ａ級	900点以上	様々な分野、場面において十分なコミュニケーション能力がある。（一般的な日本語の通訳ができる）
準Ａ級	850点以上	やや限定された分野、場面において十分なコミュニケーション能力がある。（基本的な日本語の通訳ができる）
Ｂ級	800点以上	一般的な分野、場面において十分なコミュニケーション能力がある。（日本で長期間仕事ができる）
準Ｂ級	700点以上	会社や学校において基本的なコミュニケーションが十分にできる。（日本へ出張して仕事ができる）
Ｃ級	600点以上	会社や学校において不十分なところもあるが、基本的なコミュニケーションができる。（日本に出張して簡単な仕事ができる）
Ｄ級	500点以上	会社や学校において、不十分なところもあるが、ある程度は基本的なコミュニケーションができる。（簡単な仕事ができる）

［表４］を見ると、J.TEST は、留学生や会社員などを対象に、進学や就職に向けて、より「実用的」かつ「実践的」な日本語力を測定しようとしていることがわかる。

４．三つの試験の比較・検討

１章から順に三つの試験について概観した。その概要を［表５］にまとめる。いずれも非母語話者を対象に、その日本語能力を測ろうとする試験であるが、能力そのものは物理的に直接測ることはできないため、何らかの課題を通じての間接的な測定であることを念頭においておく必要がある。

［表５］三つの試験の比較

	EJU	JLPT	J.TEST
実施団体	JASSO	海外：国際交流基金 国内：日本国際教育支援協会	日本語検定協会
実施回数／年	2回（6月・11月）	2回（7月・12月）	6回（1・3・5・7・9・11月）
海外実施国・地域	14の国・地域、17都市	64の国・地域、206都市	海外公開試験実施機関応募による
国内実施会場	16都道府県	44都道府県	大学・企業・団体等、応募による
出題領域	「読解」「聴解・聴読解」「記述」	「言語知識（文字・語彙・文法）」「読解」「聴解」	「読解」「聴解」
出題形式	読解：1文章題（400～800字）に1設問あるいは複数設問 聴読解：音声と視覚情報 聴解：音声 （以上、多肢選択） 記述：400～500字	言語知識：文字（漢字読み）、語彙（文脈規定、言い換え類義、用法）、文法（文法形式の判断、文の組立て、文章の文法） 読解：内容理解（短文～長文）、総合理解、主張理解（長文）、情報検索 聴解：課題・ポイント・概要の理解、発話表現、即時応答、統合理解 （以上、多肢選択）	読解：文法語彙問題、読解問題、漢字問題、記述問題 聴解：写真問題、聴読解問題、応答問題、会話・説明問題 （記述問題を除き、多肢選択）
目的	日本の大学等での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）を測定	課題遂行のための日本語コミュニケーション能力を測定	「実用的」かつ「実践的」な日本語力を測定

EJU と JLPT は実施団体が、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）、国際交流基金（Japan Foundation）、公益財団法人日本国際教育支援協会（JEES）という公的団体であり、文科省や外務省の後ろ盾があるという点では共通している。しかし、EJU の日本語科目は、日本の大学等での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）の測定を目的としており、JLPT は、もっと幅広い、一般的な日本語コミュニケーション能力の測定を目的としている点で異なっている。

J.TEST の実施団体は日本語検定協会・J.TEST 事務局で、運営しているのは民間の株式会社であり、主な業務として、語学試験の実施や語学教材の出版、教育サイトの運営等、手広く活動している。試験利用機関・団体等も募集によるので、試験の実施回数や会場も需要が有れば多く設定できるというメリット

がある。

出題形式については、記述問題があるのはEJUとJ.TSTである。EJUの出題形式は①二つの意見のどちらの意見に賛成か述べる問題、②一つの意見について理由を考え、自分の意見を述べる問題、③現代社会のトピックについて原因を述べ、未来を予測する問題の三つのパターンがあり、どれか選択して、400～500字程度で記述させる。一方、J.TESTは読解試験の中に記述問題があり、下線部に適当な言葉を補って文を完成させたり、与えられた語を使って、会話や文章に合う一つまたは二つの文を作ったりさせる形式で、同時に言語知識（文字・語彙・文法）を問う問題にもなっている。

これら三つの試験は大規模試験なので、客観的で採点の機械的処理が可能な多肢選択（マークシート）方式が多い。しかし、留学生にとって、日本の大学での勉学に対応できる日本語力を考えると、文章表現能力や口頭表現能力が欠かせないので、産出面での運用能力を測る記述問題は必要である。

5．留学生に求められる日本語力

はじめに、日本語母語話者か否かは措いて、日本の大学等、高等教育においてどのような日本語力が必要とされるか考えておきたい。筆者の経験からすれば、学生には以下のような学習スキルが必要とされよう。

- 講義を聞いてノートをとる/レポートを書く/発表のためのレジュメや資料を作成する/卒業論文を書く、等
- 講義を聞く/発表や報告を聞く/ゼミ等の議論の際、相手の意見を聞く、等
- 教科書や資料等を読みながら、講義や発表を聞く/ゼミでレジュメを読みながら、議論に参加する、等
- 教科書、資料、参考文献を大量に読み、その要点を読み取る/教養的読書として大量の本を読む、等

このような学習・研究活動は「聞く・話す・読む・書く」の4技能が複合しており、大学等、高等教育で授業を履修する際に必要とされるのは、日本語を用いて、上記のような課題を達成するための学習スキルをまず身につけることだと考える。門倉（2006）はアカデミック・ジャパニーズを「＜教養教育＞である」とし、教養教育の中心課題は「学び方を学ぶ」ことにあるとする[25]。その考えに従えば、日本語母語話者と非母語話者を区別する必要はない。

ただし、非母語話者である留学生の場合は、日本語を媒体とした学習スキルと日本の高等学校卒業程度の基礎学力（日本事情などの背景知識）を身につけ

る必要があり、この点では日本人学生に及ばないのは当然であろう。しかし、母語でなら論理的・分析的・批判的思考ができ、知的能力（年齢相当の認知能力）が十分にあるのに、日本語力が不十分なため、大学での勉学に支障を来たしている場合は、日本語力がつけば、日本人学生と互角にわたりあうだけの力を発揮できるかもしれない。EJU や JLPT、J.TEST などで自分の現在の日本語力を知り、次の目標を目指す動機づけになれば、これらの試験を授業で活用するのも良いのではないだろうか。

6．おわりに

本学の外国語学部では、留学生（日本語非母語話者）に対し、1・2年次には日本語能力試験（JLPT）N1、J.TEST 実用日本語検定準 B 級を、3・4年次には J.TEST 実用日本語検定準 A 級を取得できることを目標としている[26]。

現在、文科省では2020年に「留学生30万人計画」の実現に向け、大学院だけでなく学部においても、優秀な留学生の獲得と高等教育における国際競争力の強化を目指している[27]。そこでは、大学や大学院等での学術分野だけではなく、留学の「入口」から「出口」までを視野に入れ、卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動において使用される高度な日本語が求められている。そして、このような日本語力は日本語母語話者にとっても必要であると考える。

[注]

1　日本語母語話者対象の試験として、国語力検定や日本語検定がある。

2　「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議（2001）「日本留学のための新たな試験について－渡日前入学許可の実現に向けて－」に「日本の大学での勉学に対応できる日本語力（以下「アカデミック・ジャパニーズ」という。）」とある。

3　2001年12月の実施をもって廃止された。

4　2014年6月27日現在、国内で利用している大学・短期大学は100校リストされている。http://j-test.jp/?page_id=104参照（2014.8.25アクセス）。国外では日本語学習者の多い東アジア、東南アジア地域の、中国・台湾・タイ・モンゴル・韓国・ベトナムで実施されている。http://j-test/?page_id=17参照（2014.8.25アクセス）。また、社員教育や評価・選考等に利用している企業や団体も多いことが分かる（特に中国などアジアの現地法人での利用）。http://j-test.jp/?page_id=110参照（2014.8.26アクセス）。

5　中国政府から2007年に認定を受け、中国国内での受験者は政府から認定証が発行される。http://j-test.jp/?page_id=896参照（2014.10.12アクセス）。

6　ただし、これらの資格または得点を有していなくとも、日本語教育施設等の教育課程において、これらの条件に相当する日本語能力を有すると認められる者は出願を認めている。

7　http://www.jasso.go.jp/eju/index.html（2014.8.19アクセス）。

8　http://www.jasso.go.jp/eju/description_q.html（2014.8.19.アクセス）。

9　http://www.jasso.go.jp/eju/use.html（2014.10.5.アクセス）。

10　http://www.jasso.go.jp/eju/hall.html（2014.10.12アクセス）。

11　ただし、短期大学、大学院、専修学校を合わせると、合計130校が利用している。www.jasso.go.j/eju.baij.html 参照（2014.10.5.アクセス）

12　www.jasso.go.jp/eju/documents/jfljpn.pdf（2014.8.19アクセス）。

13　www.jlpt.jp/statistics/index.html（2014.10.12アクセス）。

14　海外では、７月の試験だけ行う都市や、12月の試験だけ行う都市もある。

15　www.jlpt.jp/about/points.html（2014.10.12アクセス）

16　www.jlpt.jp/about/levelsummary.html（2014.10.12アクセス）

17　「日本語能力試験 Can-do 自己評価調査レポート≪最終評価≫」（2012年10月発表）www.jlpt.jp/about/pdf/cds_final_report.pdf（2014.10.12アクセス）

18　www.jlpt.jp/about/candolist.html（2014.10.12アクセス）

19　ACTFL（全米外国語教育協会）や欧州評議会の CEFR（ヨーロッパ参照枠）など。国際交流基金が開発した「JF 日本語教育スタンダード」は、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるためのツールだが、CEFR の考え方を基にしている。

20　www.jlpt.jp/about/merit.html（2014.10.12アクセス）

21　www.j-test.jp/?page_id=2（2014.10.13アクセス）

22　www.j-test.jp/data/AD.pdf（2014.10.13アクセス）

23　www.j-test.jp/?p=1515（2014.10.13アクセス）

24　注23に同じ。

25　門倉正美(2006)「＜学びとコミュニケーション＞の日本語力　アカデミック・ジャパニーズからの発信」門倉正美・筒井陽一・三宅和子編（2006）『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房　p.7

26　これは外国語学科日本語専攻に所属する正規留学生の場合である。

27　http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afiledfile/2013/12/24/1342726_2.pdf(2014.10.22アクセス)

[参考文献]
門倉正美（2009）「日本留学試験のプロフィシェンシー－「複テキスト性」という観点の提案－」『アカデミックジャーナル１』pp.1-16
門倉正美（2012）「留学生と大学日本語教育－留学生30万人計画と留学生のための大学日本語教育－」ウェブマガジン『留学交流』Vol.19　pp.1-7　独立行政法人日本学生支援機構
門倉正美・筒井陽一・三宅和子編（2006）『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
坂本惠（2006）「中上級、上級におけるアカデミック・ジャパニーズの試み－『国境を越えて』をテキストとして－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』No.32　pp.205-211
坂本惠（2007）「「アカデミック・ジャパニーズ」での教育項目について考える：JLC 日本語スタンダーズに向けて」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』No.33　pp.97-110
鈴木美加（2011）「「アカデミック・ジャパニーズ」のバリエーション－日本人学生との交流も視野に入れながら－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』No.37　pp.135－144
森朋子（2005）「大学教育における「アカデミック・ジャパニーズ」を考える」『東京家政学院大学紀要』第45号　pp.117-122

[参照ウェブサイト]
http:// www.jasso.go.jp/eju/report.html（2014.10.5アクセス）「『日本留学のための新たな試験』最終報告-JASSO」（2010年８月）
http://www.jasso.go.jp/eju/index.html（2014.8.19アクセス）
http://www.jlpt.jp/（2014.8.19アクセス）
http://www.jees.or.jp/jlpt/（2014.8.24アクセス）
http://www.j-test.jp/?page_id=2（2014.8.24アクセス）
http://www.mofa/go/jp/mofaj/foles/000022908.pdf（2014.9.28アクセス）「海外における日本語の普及促進に関する有識者懇談会『最終報告書』」（2013年12月20日）
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afiledfile/2013/12/24/1342726_2.pdf（2014.10.22アクセス）「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）」（2013年12月18日）

日本語試験に関する一考察－日本語非母語話者対象の試験を中心に－

A Comparative Study of Japanese Language Examinations: As an entry requirement for Japanese Universities

Megumi YAMASAKI

There are three main Japanese language examinations: EJU (Examination for Japanese University Admission for International Students, JLPT (Japanese Language Proficiency Test) and J.TEST (J.TEST Test of practical Japanese) that are currently used to assess Japanese proficiency at university level. Many universities in Japan accept one of the latter three exam results as part of non-native student entry selection onto various academic programmes. This study explores what these examinations reveal about a non-native student's Japanese competence to study an academic subject at Japanese universities. By comparing, contrasting and characterising these three examinations, valuable insights are sought into what are the required skills and competences in Japanese by non-native speakers studying at university level in Japan. Taking notes during the lectures, writing reports, giving presentations in class and so on are the basic linguistic skills required not only by the foreign students but by native students. This paper argues that what is required from non-native speakers of Japanese at university level is not just an isolated set of linguistic competences but also related cultural awareness and the ability to develop linguistic knowledge relevant to their field of study.